2020 年度　ソニー幼児教育支援プログラム

科学する心を育てる　～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

『 あめ やったらいいなぁ・・・』

― 気づきのタネは上昇気流に乗って ―

社会福祉法人　照治福祉会

阿武山たつの子認定こども園

目　次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ．「科学する心」に対する考え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅲ．昨年の経験を今年度の取り組みへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅳ．実践事例

3･4･5 歳児　りすホーム（文：加美優希）・・・・・・・・・・・・　2～10

3･4･5 歳児　うさぎホーム（文：浜田　蛍）・・・・・・・・・・・　11～18

Ⅴ．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19

Ⅵ．今後の方向性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20

Ⅰ．はじめに

今年は新型コロナウイルスの感染拡大により、6 月中旬までは登園自粛期間となり、その間はクラスとして何かに取り組むことが出来なかった。そのためこの論文の執筆についても、本当に書けるのかという不安があった。しかし自粛期間が明けて通常保育が始まり、各クラスで試しに執筆してみると、昨年度までよりも約 2 か月半遅いスタートであったにも関わらず、どのクラスも書く内容に困ることはなく、子どもたちの心が動く瞬間をキャッチする保育者の視点が育っていると実感した。

一昨年からソニー幼児教育支援プログラムの論文に応募を始め、昨年までの 2 年間は全クラスで論文の執筆に取り組んだ。しかし限られたページ数に全クラス分をまとめることの難しさに直面し、「論文で取り上げるクラスを絞って、より深く掘り下げる方が良いのではないか」との意見が職員の間から多数出ていた。

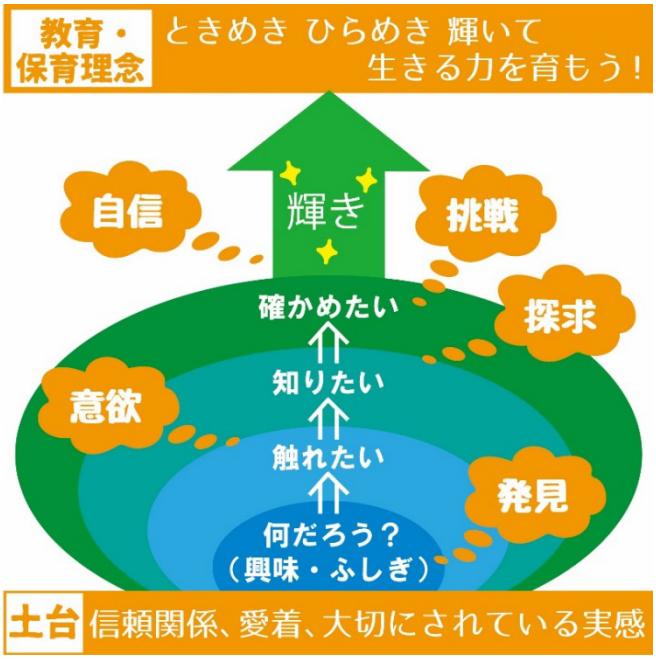
そこで、上述のように一度全クラスがそれぞれに論文を執筆し、今年度初の園内研修において全クラスの職員で読み合わせと意見交換を行ってみた。すると、やはり内容をより深く掘り下げるためには、執筆するクラスの数を絞る方が良いとの意見が多数であった。そこでテーマに共通点が見え、執筆に対しても意欲のあったりすホームとうさぎホームの 2 クラス（ともに 3～5 歳児）が執筆することに決定した。ただし、他のクラスは全く関与しないという訳ではなく、定期的に園内研修の時間を設け、他クラスの職員も集まって読み合わせや意見交換を引き続き行った。

Ⅱ．「科学する心」に対する考え方

当園の教育･保育理念である『ときめき ひらめき 輝いて 生きる力を育もう!』という言葉に照らして考えたとき、「子どもの心が動かされ、ときめいたりひらめいたりする瞬間」の一つひとつが「科学する心」に繋がるのではないか。

そして、子どもたちの心が動かされるような体験を提供する為の人的環境である保育者自身も「科学する心」を持つことが必要なのではないだろうか。

こうした考えから、3 年前に取り組みを始めた「ドキュメンテーション」の手法を活用して、これまでは気づけなかったような子どもたちの心の動きを読み取り、それを園での活動に繋げてさらに深めていく力を、保育者自身が獲得する必要があると考える。



Ⅲ．昨年の経験を今年度の取り組みへ・・・

昨年度の論文に対する講評の中で「保育者が遊びの方向を決めているようにも読み取れる場面があります。」との指摘を受け、今年度はそうならないように意識して保育を行っているつもりだった。 しかし、とり上げた事例に限らず保育の中で、知らず知らずのうちに保育者が正しい答えにたどり着かせなければならないと思い込んでしまっていたり、子ども達の感じたことや考えなどを予測で決めつけて解釈してしまったりする傾向が多くあり、 論文執筆を行う中でその事に初めて気付くことが何度もあった。この論文を執筆したことで、保育者の「思い込み」や「決めつけ」がいかに根深く私達保育者に浸透してしまっているかを改めて実感した。

子どもを見守る姿勢として、保育者は子どもの気づきを待ち、それを根気強くサポートすること、子どもの主体性に任せること、それを全職員の共通認識としていくことの難しさと必要性を改めて痛感した。

今後も引き続き論文の執筆に取り組みながら、「思い込み」や「決めつけ」から脱却し、子ども達の率直な疑問や考えをそのまま受け止め、共に考え、共に実感し、共に楽しみながら成長していけるような保育を目指していきたい。

雨っておもしろい！

～雨から広がる子どもの世界～

3・4・5 歳児　異年齢クラス　りすホーム

【活動のきっかけ】《5月末》

もうすぐ梅雨の季節。コロナ禍で登園自粛の期間、家庭で過ごしている友だちとも同じことを経験し、共有できるものはないかと思い、ペットボトルとマスキングテープを使って“梅雨の時期で１番雨が降った日はいつか？”を調べる実験を子ども達に提案し、お便りで知らせた。それをきっかけに子どもたちは、空を見つめながら「今日は雨降るかな？」などと友だちと話す姿が見られ、雨が降る日を楽しみにしている様子だった。

場面①　雨が降った！　　6月10日

実験の提案をしてから、子どもたちは窓の外を見つめる時間が増えた。
“早く雨が降ってほしい”という思いからか、曇り空になると
「雨降ってるんちゃう！？」と、テラスに飛び出しては空を見上げたり
手を広げたりして確かめる子どもたち。
まだ降らない雨にガッカリした様子が見られた。

いつものように賑やかな給食を楽しんでいると
A 児(5)「雨降ってる！音がする！」
窓の外を見ると小雨が降り始め、窓が濡れていた。

B 児(5)「急いで！ペットボトル置かないと！」
A児(5)「貸して！俺がする！」
扉を開けてすぐ足元付近にペットボトルを置いた。
C 児(5)「そこちゃう！雨あんまり入らへんやん！」
A児（5）は、上（空）を見た。
扉を出てすぐの場所には、屋根はないが
手動式テントが折りたたまれてあったので
少し雨が入りづらい。

C児（5）「ここは？」
先ほどの場所から30㎝程前に出た場所だった。
A児も、手動式テントの存在を確認したので納得した様子。

数分後…
扉の前には、ペットボトルの様子を見ようと子どもたちが集まっていた。
B児（5）「全然溜まってへんやん！」
B児（5）「ここやめよ！見て！テントのところ！」
見つけたのは、簡易テントに溜まった雨が何か所かに分かれて
滴り落ちる場所で、そこにはポタポタと大粒の雫が落ちていた。
C児（5）「すご！」
驚いた様子だった。

急いでペットボトルの引っ越しをする子どもたち。
ペットボトルとテントから染み出る雫の位置を確認しながら
首を上下に振り、雫を捕まえるようにして入れていた。
ポトポトとペットボトルに入る音が聞こえると
B児（5）「入った！」
満足した子ども達は、「濡れるから戻ろ」と部屋に戻った。
子ども達はどれだけ溜まるのか楽しみにしているようだった。

3人は窓から何度もペットボトルを確認し、どんどん溜まる雨に大興奮だった。その日は、15 分～20分程で2L サイズを半分に切ったペットボトルいっぱいに雨が溜まった。

3 人は部屋にある“みんな聞いて”のベルを鳴らして
「みんな聞いて！ペットボトルに雨が溜まってます！」と
クラスの友だちに知らせていた。

【場面① 考察】
・雲の量や色を見て「雨降るかも」と予測する子どもたち。集いの時間などに「今日は青空が気持ちよかったね！暑かったね！」などと気象情報や保育者が感じたことを伝えるなどして、さらに活動に興味が湧くよう声を掛けた。
・集いの時間以外にも、意見交換や気持ちの共有、思いを言葉にすることを大切にしたいと、部屋にハンドベルを1つ置いてある。それを鳴らしては「みんな聞いて～！あのな～」と、思いを言葉にする子どもたち。雨がペットボトルに溜まった喜びをクラスの子どもたちに報告する姿があったことで、より活動が盛り上がった。
・B児（5）は、A児（5）C児（5）が試す姿を見て、周囲を見回しテントの雫に気付いた。一見すると他児が経験している姿を見ていただけに思えるB児にも学びがあったことが伺える。
・A児（5）は、よく空を見て「先生まだ雨降ってへんで」と保育者に話す姿があった。活動に興味、関心があることを強く感じたので「A児（5）くん、先生も（雨が早く降らへんか）ワクワクする！」と、声を掛けた。A 児(5)は期待を膨らませたようだった。

場面② どっちかな？雨がたくさん降るのは… 6月12日

雨が降るとテントの下へペットボトルを置く子どもたち。
B児（5）「こっちはどうなん？」
西側のテラスから、屋根もテントも何もない
南側のテラスへペットボトルを引っ越した。

B児（5）は、雨が降り落ちる地面をじっと見ながら、雫の大きさを頼りにペットボトルを置いた。
一方、一緒に南側テラスへ出たC児（5）は、空を見て頭の上に手を広げ、どれくらい雨が降っているのか肌で感じている様子だった。

B児（5）「やっぱりこっちやな！」
もとの西側テラスのテント下へ。
C児（5）「全然雨少なかったな」
再び西側テントの下へペットボトルを置いた。

南側

西側

【場面② 考察】
・B児（5）は翌日になると南側テラスの空の下に置いた。子どもたちは、西側テラスと南側テラスとで場所を変え、同じことをして試行錯誤していた。
・同じ目的をもっていても、確認の仕方は子どもによって異なっていた。

場面③ たくさん雨を溜めて大きいグラフを作りたい！6月12日～7月30日

久しぶりに登園した子にも進捗がわかるよう、ペットボトルに溜まった雨の量を、マスキングテープを使ってグラフにすることを保育者が提案した。
年上のお兄さんお姉さんが、真剣な表情でグラフを作る姿を見て
D児（3）E児（3）が「やりたい！」と保育者に訴えた。
そこで保育者が年上の子どもたちにそのことを伝え、「教えてくれる？」と尋ねると、年下の友だちを気にかけながら集めた雨を自慢げに測る姿があった。
出来たグラフを見た 3 歳児は「（雨）いっぱいやな！」と満足そうな表情をしていた。

グラフが高くなるにつれ、わくわくと嬉しそうな子どもたち。
たくさん雨を溜めて、グラフが前日よりも高くなると一層喜び、
雨を集めることにさらに夢中になっていった。

テントから落ちる雫の下に
C児（5）D児（3）は、ペットボトルを置いた。
テントから落ちる雫を不思議そうに見つめ
手で雫が出る先のテントに触れた。
C児（5）「うわ！見て！すごい！」
D児（3）「雨いっぱいジャーって出てん！」
興奮した様子で保育者に話す。
全てのテントの雫が出る先を触れ、ペットボトル3本分の雨を集めた。
子どもたちはグラフを見て満足そうだった。

雨が降ったりやんだりした日は、ペットボトルを直接テントに当てて雨を押し出すようにしていた。
B児（5）「こぼしたくない」
C児（5）「これも（雨）出るな」
新たな雨の集め方を発見することを楽しんでいた。
B児（5）「絞るから持っててな！」
テントを手で絞ってペットボトルに直接雨を入れる姿もあった。
D児（3）「こうするねんで！」
年上の友だちに教えてもらったことを同級生の友だちに教える姿があった。雨に濡れることも気にせず、夢中になって取り組む子どもたち。

←押し出している姿

絞るから持っててな！

↓雨を絞りだす姿

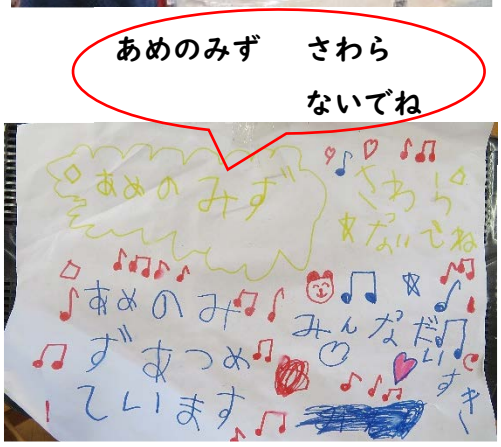
【場面③ 考察】
・保育者は、縦の繋がり（異年齢の友だちへの思いやりや尊敬）を大切にできるきっかけになると願って、年上の子どもたちに任せた。するとそのことをきっかけに、グラフを測るだけでなく、その後の活動全体において３歳児と一緒に取り組む姿が見られるようになった。
・当初のきっかけは保育者が発案した「1番雨が降った日はいつか」という実験だったが、結果的に子どもたちは雨を“集める”ことに夢中になり、「雨をたくさん集められた日はいつか」という取り組みに移っていった。正しい調べ方について伝えることはあえてせず、子どもたちが意欲的に取り組む姿を大切にしたいと思い見守った。
・「グラフを高くしたい」という意欲から、「どうすれば雨を溜めることができるか」を考え、新しい方法を編み出し、ワクワクした思いで取り組んでいるように感じた。

場面④ 雨を捨てない！置いておきたい！　6月12～7月30日

初日に溜めた雨がペットボトルに残っていたため、翌日の雨集めに使う事ができなかった。保育者がどうするか尋ねると・・・

F児（5）「捨てたくない！もったいない！」
F児（5）「空には雲があるから、もしかしたら置いてたら白くなるかも！」
G児（4）「置いてたら固まるんちゃう？」
周りの子どもたち「置いときたい！」「雨集めたい！」

B児（5）「これに入れよう！大きいし！」
B 児(5)は水槽を提案し、「雨を集めています」の手紙をそこに貼った。



【場面④ 考察】
・子ども達は集めた雨への愛着を感じ、普通の水とは違って何かが起こるかもしれないという期待を持っているようだった。
・水槽に手紙を貼る姿に、大切にしたいという思いが溢れているように感じた。
・雨水に対する子どもたちの豊かな発想、子ども独自の世界観に驚いた。

場面⑤ 割れない雨の泡　6月18・25日

ペットボトルに溜めた雨を水槽に移す際、表面に水泡が出来た。
C児（5）「大きい泡！割れんの遅くない？！」
J児（5）「触ってみーよう…え？！あんまり割れへん！」
C児（5）「ほら見て！引っついてくる！」（指で泡を動かす）
J児（5）「ほんまや！すげ！」
C児（5）「泡、牛乳に似てるな！」

雨の水の水泡は、ねっとりとした弾力がありそれに似たものとして、おやつの牛乳をコップに入れる時にできる泡を思い出していた。

B児（5）「すごい！雨が引っ付いてくる！」
何度も水槽に手を入れて楽しむ子どもたちだった。

【場面⑤ 考察】
・割れない水泡を見て、おやつの牛乳みたいだと表現した子どもたちの姿から、日々の生活が気づきに繋がっていることがわかる。
・泡の粘りが強いと気づいたことに保育者は驚いた。子どもたちは泡が壊れやすいことを知っていた。

場面⑥ キラキラ光る白いもの…これはなに？　6月30日

朝から強い雨が降っていた。
B児（5）「先生！雨が落ちたところ、キラキラ光ってる！（※1）」
保育者「え？どれ？」
B児（5）「ほら！動いてるやん！（※1）」
指をさした場所を見ると、雨が降った時に出来る
小さなしぶきのような物が白く光り動いているように見えた。
この日は特に強い雨だったので、テラスに降る雨が強く打ち
今まで気づかなかったことに気付いた様子の子どもたち。

B児（5）「なんで？！すごい！」
他のたくさんの子どもたちも興味を持ちテラス側の扉に集まった。

B児（5）「わかった！雨やから泡がついて白いのが出るんや！」
C児（5）「雨は空やから、小さい雪とか氷が入ってて、落ちた時に白く光るんちがう？」
B児（5）「見て？すぐ触ったら手も光るで！（※1）」

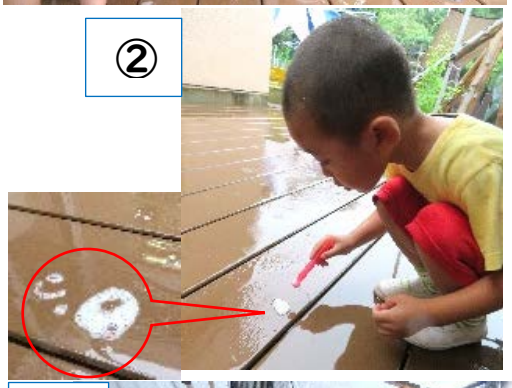
濡れた手を、友だちに見せ感じたことを共有する姿が見られた。
G児（4）「ほんまや！めっちゃ光ってるやん！キラキラしてる！」
キラキラ白く光るものに興味津々の子どもたちだった。

【場面⑥　考察】
・初日に比べ、子どもたちが窓の外を見る時間が増え、これまで気付かなかった新たな発見（※1）をしていた。
・B児（5）の発見に「すごいね！大発見だね！」と保育者が共感した。するとさらに手を伸ばし触れて確認する姿があった。B 児(5)は自分の発見を言葉にして共有することで、キラキラ光る雨にさらに興味を持ったのかもしれない。
・雨を集めるという取り組みから、雨そのものの性質に興味を持った瞬間が見てとれる。

場面⑦　キラキラ光る白いものを作りたい！　　6月30日

B児（5）「雨が落ちた時とか、雨のケース入れる時も泡できるやん？
まずシャボン玉作ってみたら（キラキラ）できるんちゃうん！」
B 児（5）の提案から、次はシャボン玉作りが始まった。
手洗い石鹸や水、工作のり、食器洗剤を使ってシャボン玉液を作る。
完成した手作りシャボン玉液を持ってテラスへ。
①ストローや穴が開いたヤクルト容器に、液をつけて吹く。
B児（5）「あれ？なんかちがう。泡だけやん」
吹いた息と一緒に大きな泡が落ちた。
②ストローについた液を直接テラス床につける。
H児（3）「ちゃう！こんなんじゃない！」
床についた泡に、息を吹きかけるが、
テントの外の雨が強く打ち付けている場所と見比べ
H児（3）「ちゃう！」再び確認。
③テントから滴り落ちる雨に液がついたストローをあてる。
I児（5）「こうしたら雨みたいに落ちるかな？」
足元に落ちた泡が、細かい泡になり小さく跳ねた。
B児（5）「え！そっくりや！」「すごい！できた！一緒や！」
I児（5）「やったー！できたね！」
「できた！」の声に、周りの子どもたちも驚いた様子で集まり
B児（5）とI児（5）の動きを真似て挑戦する。
D児（3）「すごいね！」
年上の友だちを憧れの眼差しで見ていた。

①

②


③

【場面⑦ 考察】
・子どもたちから出たアイディア（石鹸など）を実践できるように「必要な物あったら教えてね」と、保育者が声を掛け、材料を集め環境を整えたことで、様々な提案をひとつひとつ試すことができた。
・それぞれがシャボン玉液を作り始めるのではなく、一つのものをみんなで協力して作る姿があった。意見がぶつかり合うこともあったが、子どもたちの知恵や今までの経験を出し合って協力する姿に成長を感じた。
・①の場面での納得がいかない結果を見て、保育者はシャボン玉液を調節するのかなと予測した。しかし子どもたちは泡の落とし方などを工夫していた。子どもたちなりに求めているものに近づけようと試行錯誤する姿に驚いた。
・ひとつひとつ試みる際に、子どもたちの気付きや発した言葉を保育者が拾って皆に伝えた。その言葉を聞いた子どもが「次はこうしたら？」と提案する姿があり、全体で同じ目的を持ちながら楽しめた。

場面⑧ 大発見！雨の水と水道水のちがい　　7月10日

折り紙が好きなI児（5）が、雨水を溜めた水槽に折り紙で使った金魚を貼りつけた。
I児（5）「泳いでるみたーい！」
保育者「ほんとに泳がしてみる？」
I児（5）「したい！じゃあ…雨と水と両方したい！」
そこで集いの時間にクラスのみんなで金魚を泳がせてみることにした。

水道水…折り紙の金魚をいれると浮いた。
雨の水…折り紙の金魚を入れるとくるりと丸まった。
I児（5）「すごい！」
H児（3）「動いたで！」
I児（5）「じゃあさ！次は粘土つけて沈めよう！」

水道水…粘土を付けた金魚がストンと沈んだ。
雨の水…粘土を付けた金魚が左右に揺れながら沈んだ。
C児（5）「ゆらゆらした！」
G児（4）「すごいな！雨！」
B児（5）「じゃあ、泡は？」

おままごとの泡立て器で2つを混ぜ比べた。
水道水と雨水にちがいは、見つからなかった。
K児（4）「音が違う！」
B児（5）「ほんまや！みんな静かにして！」
K児（4）「こっちが（水道水）カシャカシャで
こっちが（雨の水）クチャクチャいってる！」
水槽に耳を当てて確かめる姿や、金魚を泳がせて友だちと発見を共有し楽しむ姿があった。

【場面⑧ 考察】
・クラスの子どもたちが夢中になって雨を集める姿を見て、活動への興味、関心が強くなっているように感じた。I 児の提案をみんなに共有し、一緒に試してみる形を保育者が提案した。クラス皆で楽しめたことで、「すごかったな！」「金魚ゆらゆらしてたな！」と感想を話したり、意見交換をしたり、より活動がクラス全体で盛り上がった。
・透明でつかみどころのない“雨”そのものの性質に子どもたちは初めて気付くことができた。
・子どもたちの豊かな発想やひらめきに保育者は驚き、普段から遊んでいる粘土を使いたいという考えには子どもたちらしさを感じた。

場面⑨　雨がたくさん降った日はいつ？　　8月26日

④

⑤

グラフ（④）を見て子どもたちと雨を集めた量を振り返ることにした。
C児（5）「6月30日すご！多いな」
F児（5）「10日と25日一緒で小さい！」
カレンダーを使って、雨が降った日に絵で印をつけた（⑤）。
C児（5）「数えよう！」
B児（5）「6月が5回で…7月が7回！」
保育者「8月は0回やね！」
子どもたち「えー！」
C児（5）「全部で12回か…」
保育者「8月降らなかったの不思議だね」
C児（5）「8月は夏やから！梅雨ちゃうからや！」
F児（5）「じゃあ、12回また降ったら梅雨ってことなん？」
子どもたち「ほんまや…」
子どもたちは、梅雨が再び来るのかどうか調べようとしていた。

【場面⑨　考察】
・グラフの結果をカレンダーに書き写すことで、誰でも見て分かるようになるとともに、自分たちの成果が可視化され、子どもたち自身も達成感を感じていたようだった。
・6月30日のことや、少ない雨の日のことなどを保育者と一緒に振り返った。子どもたちの輝いていた姿や夢中になっていたことなどを保育者が話し、再び楽しい思い出や達成感を共有した。
・子どもたちが自分で何かに気付いたり、考えたり、振り返ったりできるような問いかけ方を意識して話した。

環境構成

【可視化】

・取り組みの成果や子どもたちの言葉などは、グラフや文字、絵などに表し、子どもの目線の高さに合わせて、コーナーを作って掲示した。子どもたちも一緒に作り上げることで、展示物に愛着を持ち、活動がより盛り上がった。
・文字だけではなく全員が理解できるよう、イラストなどを入れることで、3歳児から5歳児まで皆で取り組み、楽しめるよう工夫した。その結果、クラス皆で共有し、同じ目的を持って意見交換する姿がたくさんあった。
・特に今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、休園する子や昼帰りの子が例年に比べ多かった中で、こうした掲示物があることで、クラス全体での共有ができ、一丸となって取り組むことができた。

【学びのコーナー】

・普段から絵本や図鑑、廃材などを「学びのコーナー」として部屋のまとまった場所に設置している。実験の道具類も、子どもたちが何か閃いた瞬間に必ず手が届くよう、同じコーナー内に置くことを意識した。そのことによって、子どもたちは思いついたときにいつでも廃材を使って何かを作ったり、実験を楽しんだりすることができた。「学びのコーナー」の存在によって探求心がさらに増し、活動が続くきっかけになったように思う。

【伝えたい】

・子どもたちが自分の想いを伝えたり、意見交換をしたりできるように「みんな聞いて！」のハンドベルを部屋に置いている。子どもたちは日頃から、自分が作った大切なおもちゃをみんなに紹介したり、家から持ってきた廃材を「大切に使ってねー！」と伝えたりしている。自分の意見を言葉にすることも大切にしているが、相手の意見を聞く、知る、寄り添うことも大切にできるきっかけとなればと思っている。

・ベルが鳴ると周りの子どもたちはその子に興味津々。鳴らした子は必ず「みんな聞いてー！」という言葉を言った後に、自分の意見を伝えている。

子どもたちのミニエピソード

【どうやって雨は降るの？】

「雨はどうやって降るの？」という保育者の問いかけに子どもたちらしい様々な意見が聞けた。

S児（5）「雲の中に氷があって溶けるから雨になるねん」
C児（5）「雲の中に水があって重くなるから雨になるって
お父さんが言ってた！」
R児（4）「おれ知ってるで！だって絵本にあったもん！
首の長い女の人の絵本で、空に行くと鬼がいて
水撒くやつと風のうちわ持ってた！」

R児（4）が言う“ろくろっくび”という絵本を見せると、本当のことを知れたように「ほんまや！」と、目を輝かせる子どもたち。保育者が「たくさん雨が降った時は、鬼も大変やね」と話すと、そのことに対しても、子どもたちは「ほんまや」と口を揃えた。

【雨ってどんなもの？】

雨が入ったペットボトルを眺める子どもたち。
H児(5)「雨たくさん入ったな！」
量に満足している様子だった。
H児(5)「うわ！めっちゃ濡れてる！」
ペットボトルに触れ、濡れていることを確認する。
S児(5)「触らせて！」
ペットボトルの中に指を入れる。
S児(5)「雨冷た！」
T児(5)「うそ？！触らして？」
子どもたちは、ペットボトルの中に指を入れ温度を確かめていた。
濡れた手を頬に当てたり、においを嗅いだり…
A 児(5)「雨の味や！」と指をなめ、味を確かめる子どももいた。

【もう雨降らないの？】

7月下旬　雨が降る日が少なくなった。
C児（5）が、窓の外をじっと見つめていた。

保育者「どうしたの？」
C児（5）「もう雨降らへんのかなーと思ってん」
保育者「なんで？」
C児（5）「雨降ってほしいから」
C児（5）「最近あれ（ペットボトル）使ってないね！」
その話しを聞いたA児（5）は、
てるてる坊主を逆さまにして部屋に飾った。
A児（5）「これで雨降るで！」
友だちを想う優しい気持ちが溢れていた。

【まとめ・考察】

・なかなか降らない雨に、「雨降ってへんな」と、何度も外を見つめ待ち遠しそうにしていた子どもたち。梅雨の時期を、楽しくワクワクしながら過ごしてほしいという保育者の思いを子どもたちはそのまま、それ以上に感じてくれた。活動を通して、大人は予測しないような実験や発見が生まれた。疑問に思う姿、不思議に感じて確かめる子どもたちの姿から取り組みを通して考える力が育っていったように思う。子どもたちは、自ら発見することで自信を得て、疑問を次から次へと発見につなげその過程にはひらめきが溢れていた。そしてその活動自体が他の子どもたちや保育者、保護者も巻き込んでどんどん大きな渦へと育っていった。それが、子どもたちの科学する心を育てることにつながったと思う。発見を重ねる度に興味が沸き、雨の性質についても知ることが出来た。結果、雨そのものについて知れたわけではないが水道水との違いに気付き、また空への興味や関心に広がったように思う。今後は、雨の水と水道水に絵の具をつけて色を比べてみたい、確かめたいと話す姿もあった。

　６月に５回、７月に７回の雨が降り合計１２回雨が降ったが、１２回降れば“梅雨”なのか？という疑問を解決しようと、雨が降ればペットボトルをテラスに出す姿が現在も続いている。取り組みを始め、ひとりの疑問や行動が、クラスの友だちへと広がり、協力、共有する楽しさを積み重ね、皆がいるからこそ活動が盛り上がったと感じた。人への興味、関心も科学する心を通して育つのだと感じた。今後も、子どもたちの自由な発想を楽しみ、人間関係の深まり、探求、発見してつくり出していく楽しさを共有しながら、子どもたちのワクワクするような活動を展開する姿を見守り寄り添っていきたい。

・子どもたちの姿から、保育者として学ぶべきことがたくさんあった。普段何気なく過ごしながら、子どもたちの姿に寄り添ううちに、保育者自身も子どもたちの活動に巻き込まれていった。子どもたちと対話し、意見を言いたくなるような安心した環境の工夫をしながら、これからも子どもたちの傍に寄り添い、キラキラ輝くひらめきを大切にしていきたい。

雲の不思議　～ なんで？どうして？がいっぱい ～

うさぎホーム（3・4・5歳児）

うさぎホームは３歳４歳５歳、合計３９人の異年齢クラス。
園舎は２階までで うさぎホームの保育室は２階にあり、保育室の前には天候がよく見えるテラスがある。
保育者は普段から子どもの様子や言葉を拾ってメモに取ったり、写真や動画に記録したりしている。

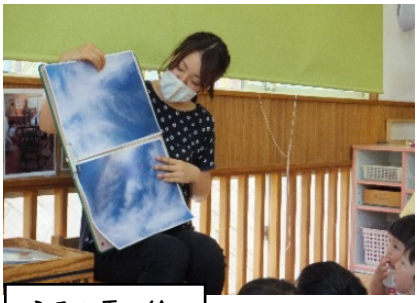
場面①　飛行機雲やから明日は雨や！　　６月 17 日

（9：45～）園庭遊び
この日はいつもよりも雲が多かった。
Ａ児(4)「飛行機雲あるから明日雨やなあ」

(11：30～)集いの時間
集いの時間は皆で対話することを大切にしている。撮影した空の写真を子どもたちに見せ、Ａ児が話したことを共有した。子どもたちからは「天気予報の人が言ってた」「〇〇先生が言ってた」との声が多く、他者からの情報で“明日は雨”と知った子が多かったことがわかる。
“どうして明日は雨なのか”を考えるきっかけとして、“あしたのてんきははれ？くもり？あめ？”を用意し、絵本をみんなで読んだ。
子どもたちは、うろこ雲と今日の空の雲が似ていることに気付き、絵本には“うろこ雲があると明日は雨”と書いてあった為、Ａ児が話していた通り、明日は雨と予想していた。

実際に自分たちの目でも雲の様子を確かめるため、テラスに出て雲の様子を観察した。
Ｂ児(4)「眩しい！」
Ｃ児(5)「うろこ雲みたいな所もあるような…でもこんなに晴れてるのにほんまかな～？」
眩しくて空を見上げることが難しく、目を細めたり、手で影を作ったり、双眼鏡の形にしたり、部屋の影を利用したりして、それぞれに考えや意見を話していた。

部屋に戻り“明日本当に雨は降るのか”、それぞれで天気を確認することになった。
Ａ児(4)：「今日の空見とこ！」



うろこ雲の絵

うろこ雲みたいな所も
あるような…

眩しい！

【場面①考察】
・Ａ児は「飛行機雲あるから明日は雨」と予測することを楽しみ、Ａ児の考えを皆に共有したことにより、周りの子どもたちも天気観察への興味が湧いた。
・絵本を通して雲の種類が沢山あることを知り、明日以降も天気観察をすることが楽しみになっていったことがうかがえる。
・空を観察する際には、その子なりに考え、それぞれに見やすい方法を実践する姿が見られた。

場面② 昨日の空と違う。なんで？　　6月18日

（8：10～）室内遊び
今日の空について早速保育者に伝える子どもたち。
D児（3）「雨降ってるで！」（テラスの雨粒を指さす）
E児（3）「本当だ～雨だ～！」（手を差し出して雨が降るのを確認する）
雨が降っていることに気付き、自分たちの予想が当たっていたことを喜んでいた。

子どもたちは天気に興味が出始め、空を見上げることが増えつつあった。
F児（4）「雨雲やなぁ」
G児（4）「何か白いなあ」
F児（4）「これは雨になるやつや、雨降ったら上黒くなるで」

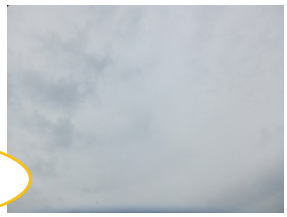
（8：20～）実際にテラスに出て天気観察を始める子どもたち。
G児（4）「腕にね、雨付いた！」
身近な雨との触れ合いを楽しんでいる様子だった。

天気について、興味を持ったH児(5)は保育者に自分の考えを話す。
H児（5）「昨日夕方にお父さんと買い物に行ったら、飛行機雲いっぱいやった。今日、昨日よりも曇ってる。皆が寝ている時、雲が太陽を隠してるんかな？」

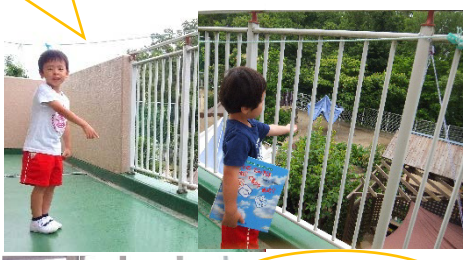
（8：30～）“あしたのてんきははれ？くもり？あめ？”の絵本を見ながら、今日の空と似た絵を探し始める。
H児（5）「これは違うなぁ…この後ろに太陽と雲があるんかな？」
F児（4）「時間経ったら雨降るかなぁ」
H児（5）「うろこ雲ってどんなんかな？昨日こんな夕焼けじゃなかった」
G児（4）「風が吹いたら雨がブアーってなるよ」
F児（4）「昨日は綺麗やのに今日は全然綺麗ちゃうなぁ」
H児（5）「お日様が傘を被っている。きっとうろこ雲のしわざ。」
絵本を見ながら、“どうして今日の空は昨日の空とは違うのか”、思い思いの考えを伝えていた。

（9：30～）集いの時間で“今日の空はどんな空なのか”共有すると、「真っ白」「太陽がなかった」という声が聞こえてきた。
I児（5）「真っ白なのは、雲が太陽を隠しているからやで！」
周りの友だちに自分の考えを話し、共有するI児(5)。

（10：00～）I児の言葉を聞き、“本当に雲が太陽を隠しているのか”実際に園庭に出てクラスの皆で天気観察を行った。
F児（4）「眩しい」
B児(4)「雲の後ろで太陽が光っているから眩しいんかな…」
B児(4)はその時に感じたことをその後の集いの時間に言葉にして伝えていた。



雨降ってるで！



雨雲やなぁ

腕にね、
雨付いた！

お日様が傘を被っている。

雨の味どんなんかな？

Ｉ児（5）：「先生、双眼鏡ってある？空見にくいから双眼鏡欲しい。」
保育者：「園には無いなぁ…、作ってみる？」
Ｉ児（5）：「作りたい！」

（11：30～）集いの時間に天気観察をして気付いたことを共有し合い、明日双眼鏡作りをすることになった。話をしていく中、急に大雨が降り、「めっちゃ雨降ってきた！」と雨の音に聴き入る子どもたち。雨の音が変化するとその違いを聞いて楽しんでいた。

【場面②考察】
・絵本を通じて雲の種類によって次の日の天気が違うことを知り、今日の空を見ながら“明日は晴れなのか雨なのか”予想や予測することを楽しんでいた。
・保育者は子どもたちの会話には入らず、子どもたちが感じたことや思ったことをそのまま他者に伝えられるよう、傍で見守り続けた。
・友だちの考えや意見などを聞くことによって、友だちと共に目的を共有することが出来ていた。
・子どもたちは“なんで？”“どうして？”という疑問があるからこそ、“もっと知りたい”という気持ちが生まれ、自分自身が納得いくまで追求し続けていたのではないか。
・実際に自分の目で天候を確かめることで、「眩しい」などの体感を通して気付けたことが多かった。

場面③ 双眼鏡から見える空はどんな空？　6月19日

クラスでは普段から工作を楽しめるよう廃材コーナーを設けている。早速朝登園した子から廃材を使って、双眼鏡作りに取り掛かっていた。
Ｇ児（4）「今日も真っ白やなあ」

（9：30～）子どもたちが作る双眼鏡はどれも個性豊かで表現の仕方や作り方が人それぞれ違っていたので、集いの時間に皆が製作した双眼鏡を見せ合ってみた。
Ｉ児（5）「もっと大きいやつ作りたい！」

（10：00～）Ｉ児（5）の言葉をきっかけに皆で巨大な双眼鏡を作ることになった。双眼鏡の見本なども無い中、段ボールやトイレットペーパーなどを組み合わせ、子どもが椅子に登らないと扱えない程の大きな双眼鏡が完成した。
Ａ児(4)「この方が良く見えるなあ」
Ｉ児(5)「葉っぱしか見えへん…」
Ｉ児(5)は覗いた先にある木の葉しか見えないことや真っ白な空しか見えないことに気付いた様子だった。

【場面③　考察】
・子どもたちの“やりたい”という気持ちを大切にし、製作に必要な物を準備して環境を整えた。
・Ｉ児は自分の頭の中にある双眼鏡の見え方と、実際に作ってみたときの見え方が違い、納得がいかない様子だった。

場面④：水蒸気との出会い　　6月23日

　天気観察を始めてから、初の快晴日。
いつも通り、嬉しそうに双眼鏡から天気を観察していた子どもたち。
Ｆ児（４）「空に雲がない！今日は空が青い！」
青い空を見て気持ち良さを感じている様子。
その後少しずつ雲が流れてくると…
Ｆ児（４）「急に雲や！この雲は飛行機みたいやな～」
時間が経つにつれ、空の様子が変わることや雲の形が変化していくことに驚いていた。

取り組みを始めてから、雲・雨・空などに興味が出始め、明日の天気を当てたり、今日の空について友だちや保育者と共有したりする姿が多く見られるようになり、集いの時間に子ども達から出てくる疑問も増えた。

Ｉ児(５)：「雲ってな、水から出来てるねんで！水と水がくっついてて、それがいっぱいになっちゃって、それで溢れちゃったのが降ってくるんちゃう？」
保育者：「そうなん？じゃあ、飛行機雲って何から出来てるん？」
Ｉ児(５)：「飛行機雲は火から出来てるねんで！ガス！ガス！」

雲に関する絵本、“あめじょあじょあ”を用意し、絵本から“雲が何から出来ているのか”確かめることに。
この絵本から、雲は水から出来ていることを知り、初めて聞く“雫”“水蒸気”という言葉に子どもたちは疑問を抱いていた。

【場面④　考察】
・時間が経つにつれ、雲が動くということに気付き、雲の形も変化していくことを知った。
・Ｆ児(４)の雲の形が「飛行機に似てる」という言葉から何かに見立てることを楽しんでいたことがわかる。
・Ｉ児(５)は雲が水から出来ていると予想したことから、飛行機はガスで動いている為、雲もガスで出来ていると予想したのかもしれない。
・雲の観察をし続けることにより、“じゃあ、雨は何から出来ているの？”という違った視点からの疑問が生まれてきた。

場面⑤：　本当に水は空に行くの？　　6月24～26日

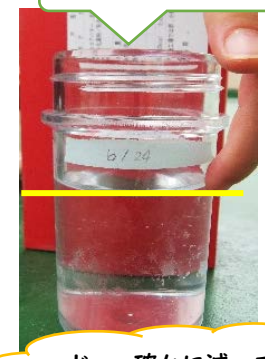
集いの時間、“本当に水は空に行くのか”を確かめる為に、容器の中に水を入れて数日放置しておく実験をすることになった。
24日は雨が降っていなかった為、水道水を容器に入れ、「さわらないでね」の紙を貼り、テラスに設置して経過を見守ることになった。

子ども達は部屋の中からテラスに置かれた容器の様子を頻繁に確認していた。

テラスに設置してから２日後…
Ｉ児(５)「先生！水減ってるで！」
Ｉ児の声を聞き、興味津々な様子で周りの子どもたちも確認し、水の減り具合を見て感動し合う。

集いの時間に、容器の中に入っていた水が減ったことを共有し、子どもたちに“減った水はどこに行ったのか”、聞いてみた。
Ｈ児(５)「お空に行った」
Ｂ児(４)「雲になった」
実際に自分たちの目で水が減ったことを確認することが出来たことで、“本当に水が空に行ったのかもしれない”と感動している様子。
今後も水の減り具合を確認し、いつになったら容器の水が全部無くなるのか、経過を見守ることになった。

２日で２㎝程減る。



じー。確かに減ってる。

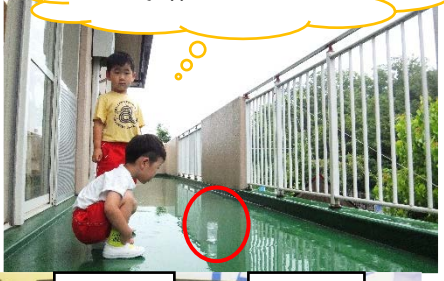
【場面⑤　考察】
・二日前の水の目安を記入していたことにより、水の減り具合が明確になった。
・自分の目で確かめている子が多かったことから、実験の経過を楽しんでいたことがわかる。
・“もっと水が無くなるかもしれない”という期待や、“誰も触っていないのに水が無くなる”という不思議さを感じていた。
・実験を通して、水が減らないかもしれないが、分からないことは実践してみないと分からないと感じ、この経験も次に繋がると思った。

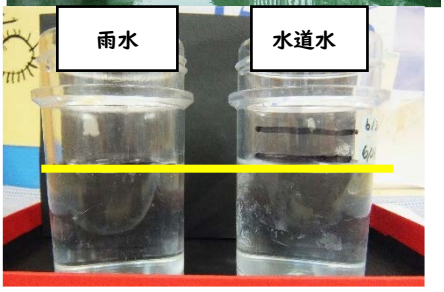
場面⑥　雨水と水道水の違い　　６月 30 日

６月24日の水蒸気の実験を行う際、雨が降っていなかった為、水道水を容器の中に入れて実験を行ったが、6月30日は久しぶりに雨が降った。
Ｉ児(5)「先生、雨降ってきたからあれ中に入れないと!」
Ｉ 児(5)の言葉を聞いて、テラスに置いていた水道水の入った容器を室内に入れた。

Ｉ児(5)「今日雨降ってるから、雨水のやつ出来るんちゃう?」
別の容器をテラスに置き、雨水を溜めた。テラスだと雨が降っている為、集いの時間に子ども達と話し合い、容器を室内の棚に置いて、雨水と水道水、両方の水の減り具合を見ることになった。

水溜まるかな？





【場面⑦　考察】
・子ども達は雨水と水道水の違いを確かめたいと思っている。
・子ども達は容器の置き場所の違いについては、疑問や違和感を抱いていない様だった。

場面⑧　水はお部屋のどこに行ったの？　　7月2日

　容器の水の減り具合を毎日のように観察しているH児(5)。
H児(5)「雨の水の方が減ってる!」
H児の声を聞き、周りの友だちも興味深そうに水の量を確かめていた。

集いの時間にH児(５)が気付いたことを子どもたちに共有した。テラスに水道水の入った容器を設置していた時は、容器の中の水は空に行ったと予測した子どもたち。途中から容器を室内に設置し、容器の中の水は部屋のどこにいったのか、子どもたちに聞いてみた。
I児(5)「どこかに染み込んでいる」
B 児(4)「天井を通り抜けてお空にいったんちゃう？」
H 児(5)「窓から出た」
I児(5)「窓には行かない!!だって真上に行くだけだろ？」
保育者「それってどういうこと？」
I児(5)「だって水は縦にしかいかない」
指を上下に動かし、水の上がり方を表現する。
H 児(5)「分かった!水が曲がって、曲がって、外に出る」
指を左右に動かしながら水の動きを表現する。
I児(5)「だから!さっきも言っただろ？水が曲がることないやん!」
J児(3)「そらが……あめが……くもが……」(考えている)

【場面⑧　考察】
・実験を始めて一週間。雨水と水道水の違いが出てきて、“どうして？”という気持ちがこれまで以上に膨らんでいた。
・テラスと室内で容器を置いた時の、水の行方が気になる様子。
・それぞれが自分の考えを言葉にし、それを共有することを楽しんでいた。また同時に、周りにいる子ども達もそのやり取りを楽しみ、一緒に考えていた。

場面⑨　水が全部無くなった！　　７月３I 日

　水蒸気の実験を始めてから約一か月後。
H児(５)「水、全部無くなってる！」

　集いの時間に容器の中の水が無くなったことを共有すると、目を輝かせて容器の中を覗き込んでいた。

【場面⑨　考察】
・実験を始めて一か月で容器の中の水が無くなり、水の行方について不思議そうにしていた。
・この実験を通して、実験というもの自体が子ども達にとって少し身近なものになったように感じる。

◎他の実践で見られた、環境の工夫や子どもたちの姿◎

毎日の天気を記録し、可視化する。

天候の違いを楽しめるよう、日々の空を写真に収め、カレンダーに張り付け、保育室に掲示した。保育者が写真を張っている姿を見て、今度は子どもたちの方から「僕もしたい！」という声が聞こえ、写真に収めるのではなく、自分が見た空を紙に描いて楽しんでいた。

「明日の天気は何かな？」

「明日の天気予報、皆にも伝えたい！」という声から、日めくりのお天気カレンダーを制作した H 児(５)。今は保育室に掲示しており、曇りなら曇りの表示に変えたり、急に雨が降ってきたら雨の表示に変えたりと、自ら表示を変えることによって、自然と天気観察を行うことが日課になった。9 月になってもこの習慣は続いている。

晴れ／曇り／雨の
日めくりカレンダー

「明日いい天気になぁれ」願いを込めて

最近、空が真っ白で太陽がないことに気付いたＦ児(4)は、絵本に描いてあったタコの作り方を参考に紙コップで太陽を作り始めた。出来上がった太陽を「これなら太陽さん出てくれるわ！」と、空がよく見える窓やドアに張っていた。F 児(4)の姿を見て、周りの子どもたちも制作を始め、てるてる坊主や虹、月、雲など、窓やドアに、天候に纏わる個性豊かな作品を飾っていた。

てるてる坊主
作ったら晴れるかな？

これが、みずたまレンズか！

“みずたまレンズ”の絵本を読んでから、みずたまレンズにも興味が出始めた。雨が降った後、園庭に出ると石垣の間や、水たまりに浮いているみずたまを発見した３歳児。「これがみずたまレンズなんや！」と実際に触れ、それ以降街角や身近なところでみずたまレンズを見つけると、「今日小学校の所の葉っぱにみずたまレンズあった！」とみずたまレンズ探しを楽しむようになった。

絵本

ここにも
みずたまレンズ！

ここ(帽子の透明の部分)にみずたまレンズがある！

次に向けて…

７月 14 日の集いの時間に、Ｉ児(５)が「雨の観測所を作りたい」と話す。
保育者「雨の観測所？」
Ｉ児(5)「阿武山観測所あるやろ？その雨のやつ作るねん」
立ち上がって阿武山地震観測所が見える方向を指した。
その方向を見ると阿武山地震観測所の煙突の部分が見えた。
Ｉ児(5)は以前、父と阿武山地震観測所まで行ったことがあるらしく、車では行けないこと、園から遠いことなどを話してくれた。“阿武山地震観測所とは何か？”、分からない子どもたちにも分かるよう、阿武山地震観測所の写真を印刷し、保育室に掲示した。

７月 15 日、写真を見つけた子どもたちは早速積み木を使って、“雨の観測所”を作り始めていた。
その日の集いで、Ｉ児(5)が「阿武山地震観測所に行きたい」と呟き、周りの友だちも阿武山地震観測所に行きたいと興味津々であった。だが園から遠いことや、阿武山地震観測所の中に入ることが出来るのかなど、色々な疑問点が出てきている。今後も引き続き子どもたちと一緒に考えていこうと思っている。

【まとめ・考察】

その日の雲の様子によって次の日の天気がわかることに気付いた子どもたちは、様々な方法で天気観察を行い、自分なりの考えで明日の天気を予想していたが、子どもたちが頼りにしている存在は絵本であったり、友だちの考えを聞いたりすることであった。

子どもたちは普段から虫や花などの名前が分からない時、すぐに図鑑や絵本などを調べ始める。今回もいくつかの天気や雲に纏わる絵本を通して新たな発見をし、絵本に書いていることは本当なのか、実際に確かめることが出来た。天候は時間によって変化していく分、子どもたちの疑問も時間の経過と共に変化していき、予測する子どもたちの目は輝いていた。

集いなどの時間に友だちの考えを聞き、自分の考えには無かったことに刺激をもらったり、「だったらこうなんじゃない？」と友だちの意見から予測してみたりと、様々な意見が飛び出し、毎日の集いの時間は“天気”のことで盛り上がっていた。最初は「飛行機雲あるから明日雨やなあ」というＡ児(4)の気付きのタネから始まったこの一連の取り組みが、徐々にクラス全体、保育者、保護者も巻き込んで大きくなり、最後には「雨の観測所を作りたい！」という提案にまで発展していった。日々分からないことに出会い、予測し結果をわくわく楽しみに待つ気持ちが科学する心に繋がっていると感じる。

この取り組みは、５歳が中心となることが多かったものの、３歳４歳の保護者の方からも「最近、空を見ていることが増えたんです。」「今日いきなり明日は雨やでって伝えてくれました！」などの声があり、その子なりの楽しみ方や成長を読み取ることが出来た。今後も疑問に感じたことを予測し結果を楽しみに待つことや、保育者や友だちと探求していくことのわくわく感を一緒に感じながら日々を楽しんでいきたいと思う。

V. まとめ

２つのクラスの取り組みを振り返ると、いずれも「雨」や「雲」など自然環境に関するものであり、さらに共通点としては、子どもたちの発想や経験などからの気づきをきっかけに展開している。自らの発想を人に伝え、そこから様々な意見を交換し、常に対話を通してたくさんの発見や疑問や予測を生みだし、実際に確かめてみるなど、ワクワクしながら行動している。

子どもたちの言動と行動は、さらに周囲の大人（保護者、保育者）まで巻き込むエネルギーを持って繰り返され、大人の想像を超える方向に広がり発展していった。その様子を右の図で表してみた。

まず、図１のように「信頼関係や愛着…」など、子どもたちは安定した生活環境の中で様々なことに興味・関心を持ち「気づきのタネ」を見つけては、友だちや保育者など周囲の人に知らせていく。同時に、自ら疑問に思ったことを発したり、他者から質問されたりする中で「疑問のタネ」が生まれ、試したくなっていく。

ひとりの子どもだけではなく、３歳児から５歳児までの複数の子どもたちが、それぞれの「気づきのタネ」や「疑問のタネ」について試しはじめ、その結果を他者と意見交換することで「共有のタネ」も増えていく。

図１

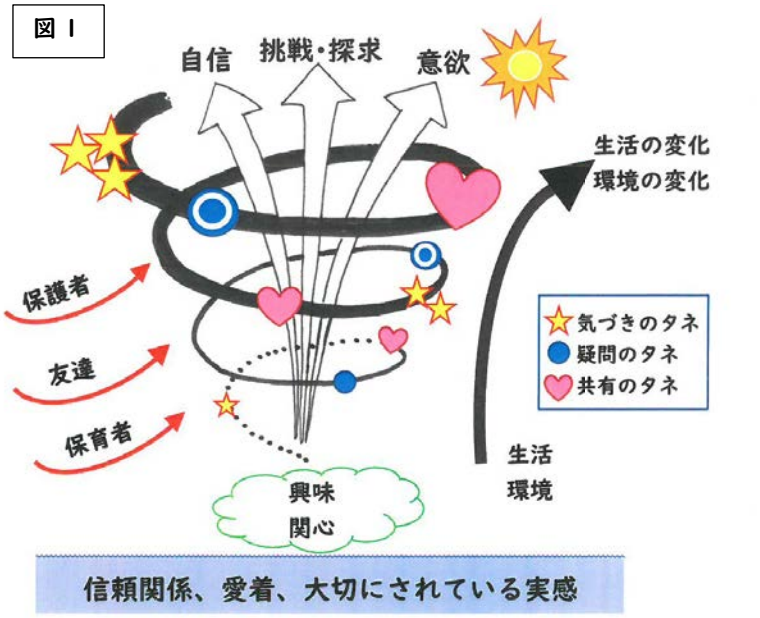
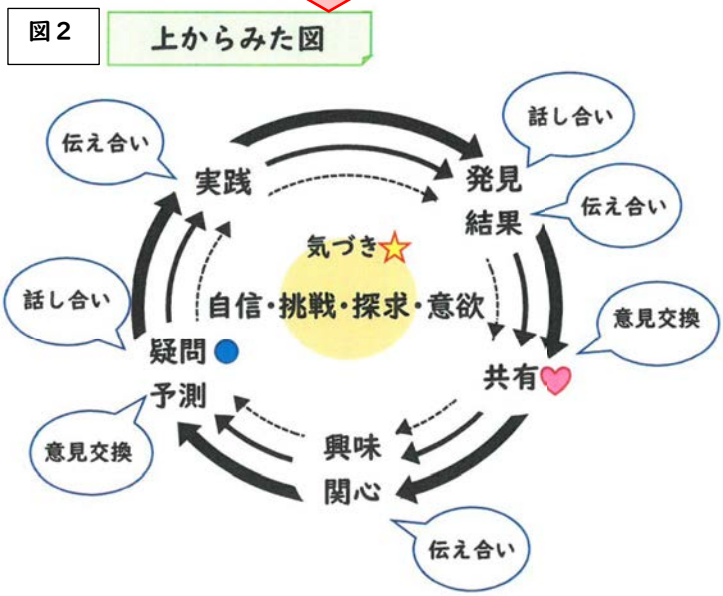


図２



このように対話する中で次々に増え育つそれぞれの「タネ」は、周囲にいる他者を知らず知らずに巻き込み、その魅力に引き込んで活動（あそび）が盛り上がっていく。その子どもたちの夢中になって取り組む活動(あそび）を継続するために、１日の生活の流れや環境構成までが変化していったことは、面白い展開である。

そこで、図１で子どもたちが「気づきのタネ」「疑問のタネ」「共有のタネ」などを増やし、育てながら渦巻き状に活動（あそび）が盛り上がっていく様子を、角度を変えて、図２「上から見た図」として表してみた。

図の中心（渦巻の起点となる部分）に興味や関心から生まれる「気づきのタネ」があり、子どもたちの豊かな発想から様々な疑問や予測（「疑問のタネ」）が飛び出し、それを確かめようと実践する。その結果や知りえた発見を他者に知らせていく（「共有のタネ」）。図の中に溢れているように、子どもたちは常に生活や環境の中で様々なものに興味・関心を持ち、他者との対話を活発に行いながらあそびがどんどん活発になって広がっていく。その次第に膨れ上がっていく様子を点線、実線、太線で表した。

これらのことからわかるように、子どもたちの活動（あそび）が、はじめは小さなきっかけ（気づき）から他者との対話を通して思いを共有することで、まるで上昇気流のように周囲を巻き込んで発展していると言える。次々に生まれてくる疑問や予測に対し、主体的にひとつひとつ試し確認していく子どもたちの姿は、「ワクワク」と「ときめき」で輝いている。その体験・経験を通して子どもたちは自信をつけ、さらに意欲的に挑戦し探求していると考える。

Ⅵ．今後の方向性について

私たちの園では自然環境を通した遊びを日常的に行っている。その中でも特に今年は、梅雨の短い期間に集中して盛り上がった取り組みが両方のクラスに見られた。

子どもたちは、何気なく発した言葉や保護者から教えてもらった事などについて、「〇〇なんやって！」「本当かな？」と素朴な疑問を持ち、自分たちで検証（実践）していった。その過程では、枠にはまらない自由な発想や意見を伝え合っていた。保育者は、子どもたちのそういった様子を見守り、根気強くサポートした。5 歳児だけが活動に参加するのではなく、3 歳児の子どもたちも安心して取り組みに参加することが出来る場を作ろうとする様々な工夫も見えた。

園全体で行った研修会では、執筆者の文章を他の職員が読み込んで、それぞれが客観的に感じたことやわかりにくいところ等を伝え合った。また、様々な経験年数や異なる感性を持った職員が、それぞれの意見を自由に出し合い熱心に意見を交わす事で、執筆者でない職員もまた、今回取り上げた事例を自分たちのものにしていった。

さらに、執筆時間の確保のための協力体制を作り、できるだけ勤務時間内で執筆が出来るようにと、全職員でサポートを行ったことも新たな成果であった。園の代表として取り組む職員が集中して書くための時間を作ったことで、執筆者でない職員も貢献できたことに喜びを感じていた。この協力体制の実践は、今後の保育の取り組み方にも大いに活かせるところである。

今後も引き続き常に対話を行う保育を実践しながら、子どもたちが自分の「気づきのタネ」を自由に発し、その興味・関心からあそびがどんどん発展していけるような環境を整えていきたい。

また同時に、人的環境である私たち保育者も、子どもたちが「やってみたい！」という思いをどのように実現していくのか、意欲的に挑戦し、探求し、自信をつけていく姿を見守り、共感しながら、共に成長していける存在でありたいと思う。

研究代表者：大谷　たえ子、岩尾　雅子
執筆者：加美　優希、浜田　蛍、大谷　冴果